

テキストマイニング及び多変量解析を用いたフォーカシング指向グループ
参加者の体験分析-グループ・プロセスに関する仮説生成の試み-【第二報】

Experienced-based Analysis of "Focusing-oriented" Group

Using Text Mining and Multivariate-Statistics

- A Trial of Hypothesis Generation of Group Processes - 【Second Report】

押岡 大覚 *

鎌倉 利光 **

寺原 美歩 ***

Oshioka Daisuke Ph. D. *

Kamakura Toshimitsu Ph. D. **

Terahara Miho ***

聖泉大学人間学部 *

愛知大学文学部 **

彦根市子ども療育センター ***

Seisen University *

Aichi University **

Hikone City Child Treatment and Education Center***

要 約

本研究は、コ・ファシリテーター方式、3日間の通い形式により実施した第2回フォーカシング指向グループ ("Focusing-oriented" Group: 以下、*F.O.G.*) 参加者から得られた《満足した点》及び《不満足な点・心残り・気がかり》に係る自由記述について、テキストマイニング及び多変量解析による分析を施し、*F.O.G.*のグループ・プロセスに関する仮説の生成を目的とした。その結果、「他者との関わり感覚」、「他者のフェルトセンスの感受」、「場のフェルトセンスの感受」の3要因による好循環を基盤とした「フェルトセンスの言語化」による体験的相互作用の経験が、*F.O.G.*において満足感を覚えるに至るグループ・プロセスである可能性が示唆された。一方、*F.O.G.*参加者は「他者との距離感」及び「自己の発信が出来ない」という2要因の悪循環の経験が、*F.O.G.*において参加者が不満足や心残り、気がかりを感じるグループ・プロセスである可能性が示唆された。ただし、これらの仮説は第2回 *F.O.G.*モデル構成から得られたものであり、これまで、あるいはこれ以降実施される *F.O.G.*モデル構成全般に汎化して考えられるか否かについては、一定の保留が必要である。

Key Words : テキストマイニング 多変量解析 フォーカシング指向グループ
グループ・プロセス 仮説生成

I 問題意識と目的

本研究は、心理臨床家に対する教育・訓練を目的としたフォーカシング指向グループ（“*Focusing-oriented*” *Group*：以下、「*F.O.G.*」という）のグループ・プロセスに関する仮説生成研究の第二報である。

*F.O.G.*とは、通常 10 名前後で構成された小集団のなかで、フェルトセンス（*Felt-sense*）の言語化を介した集団的相互作用により、ファシリテーターを含めた参加者間の体験的相互作用が促進され、心理臨床家としての教育的訓練的な場として機能することを目的としたグループである（押岡・勝倉ら, 2011）。

*F.O.G.*については、これまで複数の事例研究（例えば、押岡・白岩（2008）、OSHIOKA（2009））や実証的研究（例えば、押岡・勝倉ら（2009）、押岡（2011））が行われてきているが、効果等を生み出すグループ・プロセスに関する研究は行われてこなかった。

このような研究の現状を鑑み押岡・鎌倉ら（2016）は、第 1 回 *F.O.G.*参加者から得られた《満足した点》及び《不満足な点・心残り・気がかり》に関する自由記述を、テキストマイニング及び多変量解析により分析し、*F.O.G.*におけるグループ・プロセスを次のように報告している。すなわち、参加者は、グループ内で他者との関わりの感覚を覚え、安心できる存在として他者を感じ、その安心感を基盤として、多方向的な相互作用を経験する。そして、個人が他者との関わりの感覚を覚えるようになると、自己の身体感覚が賦活され、自己の発信ができた結果、満足感を覚える可能性がある。一方、他者の身体感覚を感じられない、あるいは自己の身体感覚を感じられない状態になると自己の発信ができない状態になり不満足感等を覚える可能性がある。

しかし、押岡・鎌倉ら（2016）においては、グループのマネジメント及びファシリテーターの心身の負担という観点から、単独ファシリテーター方式を採用した *F.O.G.*モデル構成上の課題についても指摘されている。

Gendlin & Beede（1968）は、ファシリテーターはグループにおけるその役割を担うことで、グループを見守り、支えるという役割上、言語的、あるいは非言語的な表出は少なくなるが、その反面、グループに対する責任をもって注意を払うだけでも非常に忙しい立場である、とその負担について述べている。

また、白岩・井上（1985）は、フォーカシング（Gendlin, 1981）に関するグループワークの場では、ファシリテーター自身がグループの場に流れる個人及び集団の力動について、そのフェルトセンスを言語化していくことが重要であることと同時に、ファシリテーター

は、参加者がいかに自己のフェルトセンスに触れ続けることができているかという点について、注意を向け続けることが重要であることを指摘している。

一名のみのファシリテーターが、自身のフェルトセンスを言語化しつつ、同時に参加者がフェルトセンスに触れられているか否かについて注意を向け続け、さらに、責任をもって場の関係作りや雰囲気作りの援助を数日に渡って担うことは重度の負担を強いることにもなりかねない。これは *F.O.G.* のモデル構成を考える上でも同様であり、明白な負担は軽減し、改善を図る必要がある。

そこで本研究では、複数ファシリテーター、すなわち、コ・ファシリテーター方式、3日間の通い形式により実施された第2回 *F.O.G.* 参加者から得られた《満足した点》及び《不満足な点・心残り・気がかり》に係る自由記述について、テキストマイニング及び多変量解析による分析を施し、*F.O.G.* のグループ・プロセスに関する仮説の生成を目的とする。

II リサーチ・クエスチョン

本研究のリサーチ・クエスチョンは、以下のとおりである。

<リサーチ・クエスチョン1>第2回 *F.O.G.* モデル構成における《満足した点》を構成する重要な要因にはどのようなものがあり、要因間にはどのような関係性があるのだろうか。

<リサーチ・クエスチョン2>第2回 *F.O.G.* モデル構成における《不満足な点・心残り・気がかり》を構成する重要な要因にはどのようなものがあり、要因間にはどのような関係性があるのだろうか。

III 方法

1. 第2回 *F.O.G.* の実施形態、参加要件及び参加者の属性の異同

第2回 *F.O.G.* は、コ・ファシリテーター方式による3日間の通い形式、全7セッション（1セッション：90分前後）による集中型グループとして実施した。ファシリテーターは、米国 *The Focusing Institute* の認定コーディネーター資格を有する臨床心理士（70代・女性）1名が担当した。また、コ・ファシリテーターは、フォーカシング及び集団精神療法を専門とする臨床心理士（30代・男性）1名が担当した。

インターネット等の広告媒体及び電子メールによる募集活動を行った結果、第1回 *F.O.G.* からの継続参加者も含め、事前の参加申し込みがあり、且つ、参加要件を満たした6名（男：20代1名、30代2名の計3名／女：30代2名、40代1名の計3名）の心理臨床家が参加した（Table 1 及び Table 2 を参照）。なお、継続参加者と新規参加者の異同が同定できるよ

うに、Table 2 に示した参加者 ID は第 1 回 F.O.G. から引き継いで記すこととした。

Table 1 第 2 回 F.O.G. の実施形態及び参加要件

実施形態		参加要件
第 2 回 F. O. G. 200X 年 7 月 X 日～	通い 3 日間	医療、保健、心理、教育、福祉の領域における臨床家（専門家）、もしくは、これらの領域の専門学生、大学生、大学院生で、守秘義務を遵守でき、研究の意図に同意する者

Table 2 第 2 回 F.O.G. 参加者の属性の異同

ID	性別	職業	臨床経験年数／学年	フォーカシング 経験	F. O. G. 経験
B	女	臨床心理系大学院生	修士課程 2 年生	約 3 回	2 回目
C	男	臨床心理系大学院生	修士課程 2 年生	約 15 回	2 回目
G	女	臨床心理系大学院生	修士課程 2 年生	約 10 回	1 回目
H	男	福祉職	1 年目	0 回	1 回目
I	女	臨床心理系大学院生	修士課程 2 年生	約 5 回	1 回目
J	男	臨床心理士	3 年目	約 3 回	1 回目

第 1 セッションの導入に際して、ファシリテーター及びコ・ファシリテーターは、便宜上その役割を担うが同時にグループの一参加者でもあるという姿勢を口頭で伝えた。また、セッション中は、フェルトセンスを尊重し、感じられたありのままを自由に言葉にしてみることが確認された。なお、各セッションの進行中、思考・感情・情動レベルでの交流へ傾きがちと感じられた場合、ファシリテーター及びコ・ファシリテーターは参加者の自由な語りを尊重する態度を保持しつつ、グループのなかの個人、あるいはグループ全体に対して、フェルトセンスの言語化を促す介入を行った。なお、F.O.G. の手続きの詳細は押岡・勝倉ら（2011）を参照願いたい。

2. 調査方法及び分析材料並びに分析方法

セッション終了毎に、野島（2000）を参考に作成した参加者カードを配布し、《満足した点》及び《不満足な点・心残り・気がかり》について自由記述を求めた。その際、自由記述の内容は、①他の参加者には開示しないこと、②研究目的以外では使用しないこと、を参加者に確かめた。

参加者カードから得られた自由記述の分析は、IBM SPSS Text Analytics for Surveys 4.0（以下、「Tafs」という）を用いて、以下の手続きに則り行った。

参加者カードから得られたすべての自由記述を、可能な限り原文に忠実な形で Microsoft Excel 2010（以下、「Excel」という）へ打ち込み、ローデータの作成を行った。ローデータの作成にあたっては、《満足した点》についての自由記述と、《不満足な点・心残り・気が

かり》についての自由記述をそれぞれ別のシートに打ち込んだ。また、①第何回 *F.O.G.*における、②誰の、③第何セッションについての、④何文目の自由記述であるのかが同定できるように、自由記述一文毎に *ID* を割り振った。なお、自由記述欄への記入がなかった場合は「(無記入)」との打ち込みを行った。

Excel に打ち込まれたローデータを *TafS* にインポートした後、記述者の心の動きを把握することに重きを置く感性分析によりキーワードを抽出した。抽出されたキーワードをカテゴリーとして抽出する際には、樋口 (2004)、山西 (2011)、林原・藤井ら (2011)、林原・川崎ら (2011)、大和 (2010) 等の先行研究を参考に、暫定的な基準として出現頻度 10 回以上のキーワードを第一次カテゴリーとして機械的に抽出した。抽出された第一次カテゴリー及び出現頻度 9 回以下のキーワードに対して、①日本語・英語で記された内容、例えば、「フェルトセンス」と「*Felt-sense*」の統合、②意味による統合—例えば、「自分」、「自分自身」、「私」の統合、③単体では意味の付与が困難なキーワード、例えば、「いる」、「ある」、「なる」の削除、を中心とした洗練作業を施した。その際、①どのキーワードをどのカテゴリーに追加したのか、②どのカテゴリー同士を統合したのか、③どのカテゴリーを削除したのか、そして、④それぞれの理由、の 4 点を記したカテゴライズメモを作成し、*TafS* による分析過程の文章化を行った。なお、カテゴリーの洗練作業等は、先行研究及びカテゴライズメモを参照しながら、共同研究者との意見交換を行い修正・検討を行った。

洗練作業が飽和状態に達した第二次カテゴリーを統計学的に要約する目的から、*TafS* より得られた第二次カテゴリーを変数とした主成分分析を行い、《満足した点》及び《不満足な点・心残り・気がかり》についての主成分をそれぞれ抽出した。なお、本研究では統計解析ソフトとして、*IBM SPSS Statistics 19.0.0.2* を用いた。

IV 結果

1. <リサーチ・クエスチョン 1>について

参加者カードから得られた《満足した点》(n=71) について、感性分析によりキーワードを抽出した結果、254 個のキーワードが抽出され、出現頻度 10 回以上のキーワード、①感じる (28 回)、②できる (21 回)、③メンバー (16 回)、④自分 (16 回)、⑤いる (15 回)、⑥する (12 回)、⑦体験 (11 回) の 7 個を第一次カテゴリーとして機械的に抽出した。機械的に抽出した 7 個の第一次カテゴリー及び出現頻度 9 回以下のキーワードについて、複数回の確認・洗練作業を行った結果、①言語化 (35 回)、②感じる (32 回)、③メンバー (25 回)、④自分 (19 回)、⑤フェルトセンス (17 回)、⑥グループ (16 回)、という 6 個の第

二次カテゴリが生成された。

TafS より得られた《満足した点》を構成する6個の第二次カテゴリを統計学的に要約するために主成分分析を行った (Table 3 を参照)。

Table 3 《満足した点》の主成分分析の結果

変数	主成分1 フェルトセンスの 言語化	主成分2 場のフェルト センスの感受	主成分3 他者のフェルト センスの感受	主成分4 他者との関わりの 感覚
感じる	0.03	0.73	-0.31	0.49
言語化	0.58	0.22	0.34	-0.34
フェルトセンス	0.43	0.48	0.40	-0.18
メンバー	0.26	-0.48	0.54	0.62
グループ	-0.53	0.44	0.49	0.21
自分	0.73	0.01	-0.32	0.29
固有値	1.41	1.23	1.01	0.90
累積寄与率	23.54%	43.97%	60.79%	75.72%

主成分1は、固有値1.41、主成分2は固有値1.23、主成分3は固有値1.01であった。主成分4は固有値0.90であるが、主成分4までの累積寄与率が75.72%であり、十分な論証可能性を勘案し、主成分4までの4成分を主成分として採用した。

《満足した点》の主成分1は、変数「自分」及び「言語化」並びに「フェルトセンス」が正の方向へ特に大きいという特徴を示していた。そこで、主成分1を「フェルトセンスの言語化」と解釈した。主成分2は、変数「感じる」及び「フェルトセンス」並びに「グループ」が正の方向へ特に大きいという特徴を示していた。そこで、主成分2を「場のフェルトセンスの感受」と解釈した。主成分3は、変数「メンバー」及び「グループ」並びに「フェルトセンス」が正の方向へ特に大きいという特徴を示していた。そこで、主成分3を「他者のフェルトセンスの感受」と解釈した。主成分4は、変数「メンバー」及び「感じる」が正の方向へ特に大きいという特徴を示していた。そこで、主成分4を「他者との関わりの感覚」と解釈した。

2. <リサーチ・クエスチョン2>について

参加者カードから得られた《不満足な点・心残り・気がかり》(n=60)について、感性分析によりキーワードを抽出した結果、242個のキーワードが抽出され、出現頻度10回以上のキーワード、①いる(18回)、②自分(16回)、③感じる(15回)、④思う(10回)の4個を第一次カテゴリとして機械的に抽出した。機械的に抽出した4個の第一次カテゴリ及び出現頻度9回以下のキーワードについて、複数回の確認・洗練作業を行った結果、①言語化(28回)、②感じる(23回)、③自分(17回)、④メンバー(11回)、という4個

の第二次カテゴリーが生成された。

TAFS より得られた《不満足な点・心残り・気がかり》を構成する4個の第二次カテゴリーを統計学的に要約するために主成分分析を行った (Table 4 を参照)。

Table 4 《不満足な点・心残り・気がかり》の主成分分析の結果

変数	主成分	
	主成分 1 自己の発信が出来ない	主成分 2 他者との距離感
感じる	0.35	0.84
言語化	0.83	0.11
自分	0.81	-0.09
メンバー	0.55	-0.55
固有値	1.77	1.03
累積寄与率	44.25%	69.96%

主成分 1 は、固有値 1.77、主成分 2 は固有値 1.03 であった。主成分 3 は固有値 0.74 と 1.0 以下であったため、固有値 1.0 以上の 2 成分を主成分として採用した。主成分 2 までの累積寄与率は 69.96% であり、主成分分析より得られた結果は《不満足な点・心残り・気がかり》について十分論証することが可能であると判断した。

《不満足な点・心残り・気がかり》の主成分 1 は、変数「言語化」及び「自分」並びに「メンバー」が正の方向へ特に大きいという特徴を示していた。そこで、主成分 1 を「自己の発信が出来ない」と解釈した。主成分 2 は、変数「感じる」が正の方向へ特に大きく、変数「メンバー」が負の方向へ大きいという特徴を示していた。そこで、主成分 2 を「他者との距離感」と解釈した。

V 考察

本研究では、コ・ファシリテーター方式による3日間の通い形式、全7セッションによる集中型グループとして実施した第2回 F.O.G.の参加者から得られた《満足した点》及び《不満足な点・心残り・気がかり》に係る自由記述について、テキストマイニング及び多変量解析による分析を行った。その結果、F.O.G.において参加者が満足感を覚えるに至るグループ・プロセスとして、次の仮説が考えられた。

F.O.G.の参加者は、ファシリテーター及びコ・ファシリテーターを含む複数他者と相互作用を繰り返す中で「他者との関わり感覚」を覚える。この「他者との関わり感覚」は、「他者のフェルトセンスの感受」と関連しており、同時に「場のフェルトセンスの感受」とも関連している。この「他者との関わり感覚」、「他者のフェルトセンスの感受」、「場のフェルトセンスの感受」の3要因による好循環を基盤とした「フェルトセンスの言語化」

による体験的相互作用の経験が、*F.O.G.*において満足感を覚えるに至るグループ・プロセスである可能性が考えられる。一方、*F.O.G.*において、参加者が不満足や心残り、気がかりを覚えるに至るグループ・プロセスとしては次の仮説が考えられた。

*F.O.G.*参加者は、何某かの事由により「他者との距離感」を覚えた結果、グループの中で「自己の発信が出来ない」自分を経験する。これが *F.O.G.*において不満足感等を覚えるに至るグループ・プロセスである可能性が考えられる。一方、何某かの事由により「自己の発信が出来ない」自分を経験した結果、グループの中で「他者との距離感」を覚える可能性も考えられる。すなわち、「他者との距離感」及び「自己の発信が出来ない」というこの2要因の悪循環が、*F.O.G.*において参加者に不満足や心残り、気がかりを感じさせると考えられる。

ただし、これらの仮説は第2回 *F.O.G.*モデル構成から得られたものであり、これまで、あるいはこれ以降実施される *F.O.G.*モデル構成全般に汎化して考えられるか否かについては、一定の保留が必要である。

第2回 *F.O.G.*は、第1回 *F.O.G.*での課題であったグループマネジメントの質の維持・向上及びファシリテーターの心身の負担の軽減という観点からコ・ファシリテーター方式でのモデル構成を行い実施された。

Yalom (1970) は、コ・ファシリテーター方式の利点として、①ファシリテーターが相互に補足、支持し合うことから、グループメンバーにとっての観察等の幅が広がること、②異なった役割を担ったファシリテーター同士が、率直に協力しあう姿を見ることで、グループメンバーが葛藤を克服するモデルを得られること、③初心のセラピストの成長に役立つこと等を挙げている。また、畠瀬 (1990) は、コ・ファシリテーター方式を採用する利点として、①単独ファシリテーターの個性による一方的な影響を避けることができること、②グループメンバー個々への理解と受容の目配りがきくこと、③ファシリテーターとコ・ファシリテーターの意見や感情、スタイルの相異がかえって自由な雰囲気醸成しうる、と述べている。さらに、山口・増野・中川 (1987) は、広義の集団精神療法において、男女のファシリテーターがグループ運営を担当することは、父親と母親の役割を投影できる構造になっており、さらに、年齢の差が加わることによって、当該グループのなかでどのような背景をもつファシリテーターが補助自我として期待されているかをみることができると述べている。

第2回 *F.O.G.*の特徴は、ファシリテーターが70代の女性であるのに対し、コ・ファシリ

テーターが 30 代の男性であったというファシリテーターの属性の違いが顕著であった点が挙げられる。すなわち、Yalom (1970)、畠瀬 (1990)、山口・増野・中川 (1987) による指摘のそれぞれが、第 2 回 *F.O.G.* のコ・ファシリテーター方式の特徴として該当すると考えられる。しかし、本研究から得られたグループ・プロセスに関する仮説が、コ・ファシリテーター方式を採用したことによるものなのか、属性の異なるファシリテーターがグループを運営したことによるものなのか等については検討を行うことができなかった。今後、ファシリテーターの属性の違いによる *F.O.G.* モデル構成の検討が必要になると考えられる。

第 2 回 *F.O.G.* は、第 1 回 *F.O.G.* 同様 3 日間の通い形式であることについてモデル構成上の変更はなかった。しかし、押岡・鎌倉ら (2016) は、3 日間の通い形式で行われる *F.O.G.* の課題を次のように指摘している。

「参加者は、フェルトセンスの言語化を介しての集団的相互作用によって、他者と関わり、ときには心理臨床家としての課題と直面し、それらのいくつかを解決する経験を積み重ねることになる。しかし、通い形式であることは、同時に、教育・訓練という時間から一時的に解放されて日常生活を送るという経験をもすることになる。換言すれば、心身ともに日常と非日常との間を行き来しながら、心理臨床家としての教育・訓練のための 3 日間を過ごすことになる。すなわち、《満足した点》についての仮説は、*F.O.G.* 以外の日常生活からの影響で得られた可能性を完全には否定できず、また、《不満足な点・心残り・気がかり》についての仮説は、日常場面より持ち込まれた心身の状態の結果によって生じた可能性も指摘できる。日常生活からの影響という変数を統制するためには集中的なグループ経験、すなわち宿泊形式での *F.O.G.* モデル構成を行う必要があると考える (押岡・鎌倉ら, 2016).」

先に述べたファシリテーターの属性による検討や、宿泊形式での *F.O.G.* モデル構成によるグループ・プロセスの検討等、今後様々な *F.O.G.* モデル構成から得られた《満足した点》及び《不満足な点・心残り・気がかり》等に関するデータの分析をとおして、本研究より生成された仮説の更なる洗練を期待するとともに、*F.O.G.* のグループ・プロセスが明らかになることを期待したい。

文献

福盛英明・森川友子 (2003) : 青年期における【フォーカシング的態度】と精神的健康度との関連—【体験過程尊重尺度 (The Focusing Manner Scale: FMS)】作成の試み— 心理臨

床学研究 20 (6), 580-587.

Gendlin, E.T. (1964) : A Theory of Personality Change. In Worchel, P. & Byrne, D. (eds.) ,
Personality Change. New York: John Wiley. 100-148.

Gendlin, E.T. (1981) : *Focusing*. New York: Bantam.

Gendlin, E.T. (1996) : *Focusing-Oriented Psychotherapy: A manual of the experiential method*.
New York: Guilford.

Gendlin, E.T. & Beede, J. (1968) : Experiential groups, Instructions for groups. Gazda, G.M. (ed.) ,
Innovations to group psychotherapy. Bloomington, IL: Thomas. 190-206.

畠瀬 稔 (1990) : エンカウンター・グループと心理的成長 創元社

林原 慎・藤井志保・宮里智恵・伊藤圭子・平川幸子 (2011) : 小学校における国際理解の
視点を取り入れたジェンダー教育の効果に関する研究 広島大学学部・附属学校共同研
究紀要 39, 249-254.

林原 慎・川崎正盛・小早川善伸・安松洋佳・中村千絵・深澤・清治・平川幸子 (2011) :
多文化共生社会の視座に立つ小学校外国語活動の単元開発に関する研究ーテキストマ
イニングによる効果の分析 広島大学学部・附属学校共同研究紀要 39, 177-182.

樋口耕一 (2004) : テキスト型データの計量的分析 : 2つのアプローチの峻別と統合 理論
と方法 19 (1), 101-115.

角田 豊 (1994) : 共感経験尺度改訂版 (EESR) の作成と共感性の類型化の試み 教育心理
学研究 42, 193-200.

Klein, M.H., Mathieu, P.L., Gendlin, E.T., & Kiesler, D.J. (1970) : The Experiencing Scale. *A
Research and Training Manual*, 1, 56-63.

棟方哲弥・中村 均・金森克浩・土井幸輝 (2010) : 特別支援学校におけるアシスティブ・
テクノロジー活用事例の体系的整理と分析 電子情報通信学会技術研究報告 110
(209), 11-16.

村山正治 (1980) : エンカウンター・グループの過程でフォーカシングを導入した一事例 日
本心理学会第44回大会発表論文集 637.

野島一彦 (2000) : エンカウンター・グループのファシリテーション ナカニシヤ出版.

OSHIOKA, Daisuke (2009) : Possibilities and problems of group interactions with emergence of
words from the felt-sense. *The 21st International Focusing conference in Japan, Program
Book*, 3.

- 押岡大覚 (2011) : フェルトセンスの言語化を介しての集団的相互作用を用いた心理臨床家の教育・訓練モデル構成に関する実証的研究 東京成徳大学大学院博士論文.
- 押岡大覚・勝倉孝治・白岩紘子 (2009) : Felt-sense の言語化と集団的相互作用に関する量的視点からの検討 日本人間性心理学会第 28 回大会発表論文集 62-63.
- 押岡大覚・勝倉孝治・白岩紘子 (2011) : 心理臨床家養成のためのフォーカシング指向グループへの継続参加とその効果に関する研究 人間性心理学研究 28 (2), 39-50.
- 押岡大覚・鎌倉利光・寺原美歩 (2016) : テキストマイニング及び多変量解析を用いたフォーカシング指向グループの体験分析－グループ・プロセスに関する仮説生成の試み－【第一報】 聖泉論叢 23, 1-12.
- 押岡大覚・白岩紘子 (2008) : Felt-sense Focused Group に関する基礎的研究 日本人間性心理学会第 27 回大会発表論文集 142-143.
- Purton, C. (2007) : *Focusing-Oriented Counseling Primer*. UK: PCCS Books.
- Rogers, C.R. (1970) : *Carl Rogers on Encounter Groups*. New York: Harper & Row, Publishers, Inc.
- 佐治守夫・石郷岡 泰・上里一郎 (1977) : グループ・アプローチ 誠信書房.
- 坂中正義 (2005) : 構成的エンカウンター・グループにおける心理的安全感を重視したファシリテーション－「深めない工夫」と「プロセス的視点」 教育実践研究 13, 111-120.
- 白岩紘子 (2006) : 吐く息を意識する「からだ ほぐし」とフォーカシング 目幸黙僊・黒木賢一 (編) 心理臨床におけるからだ－心身一如からの視座 朱鷺書房 132-153.
- 白岩紘子・井上澄子 (1985) : FOCUSING による GROUP WORK の試み 日本応用心理学会第 5 回大会発表論文集 35.
- 田中英理・山西博之 (2011) : 英語音声学・音韻論的特徴の習得を目指した授業効果検証 JALT journal 33 (1), 49-99.
- Yalom, I.D. & Vinogradov, S. (1989) : *Concise Guide to Group Psychotherapy*. American Psychiatric Press, Inc.
- 山口 隆・増野 肇・中川賢幸 (編) (1987) : やさしい集団精神療法 星和書店
- 山西博之 (2011) : 教育・研究のための自由記述アンケートデータ分析入門 : SPSS Text Analytics for Surveys を用いて Retrieved from <http://www.mizumot.com/method/yamanishi.pdf> (2017 年 1 月 5 日).
- 大和里美 (2010) : キャリア教育における参加型授業の有効性に関する検討－テキストマイ

ニングによる効果分析 太成学院大学紀要 **12**, 139-149.